

ヤン・ホッサールトの《ウェヌスとクピド》（ベルギー王立美術館蔵）をめぐる 一考察

篠崎 亮（東北大学）

イタリア美術の様式と主題をネーデルラントへ持ち込んだ最初の芸術家ヤン・ホッサールトの裸体画は、その意味を巡って論争が繰り広げられている。その一方の見解はパノフスキーによる《ダナエ》論（1933）に始まる道徳的解釈であり、彼らはそれを肉欲に対する戒めとみなした。しかし、近年ではこの見方に対する反論が勢力を伸ばしている。彼らはホッサールトのパトロン、ブルゴーニュのフィリップの私生活や思想に注目することで、ホッサールト作品を官能の歓びの肯定と解したのである（Sluijter, 1999）。本発表では、相反するこれらの見解を16世紀のコンテクストに照らして調停し、それによって裸の女神と愛の欲望を描いた《ウェヌスとクピド》の両面性を捉える新たな解釈を提示する。

《ウェヌスとクピド》解釈の焦点の一つは、画中に描かれたウェヌスとマルスの不倫発覚の場面を表したレリーフである。この作品のメッセージを道徳教訓とみなす者はこれを肉欲がもたらす破滅の物語と解釈し（Silver, 1986）、一方、近年刊行されたカタログ・レゾネでは、彼らが網で捕らえられていないことが強調され、野次馬としてやってきた神々は「覗き見の歓び」の表象と解されている（Schrader, 2010）。

それに対して発表者は、先行研究では見落とされていた細部、ウェヌスがマルスとの愛の交わりを主導していることに注目し、ホッサールト自身や他の同時代画家の作品との比較によって、この作品の主題が「女の力」であったことを明らかにする。これは女の誘惑が男を滅ぼすという当時人気を博したトポスであり、女に対する恐怖心やミソジニーが表されている。さらに、「女の力」は「男の愚かさ」の物語でもある（Bleyeveld, 2005）。したがって、このレリーフは女に支配される男への戒めと解釈されうる。

しかし、「女の力」にはお堅い教訓に留まらない滑稽さが含まれていたことが知られている。16世紀にはこのような、愚行を戒めているのか、愚者を笑うことで楽しんでいるのか曖昧な書物や芸術作品が『阿呆船』を嚆矢として大流行した。そして、その代表的作家であるエラスムスはフィリップと交流があった。そこで発表者は、従来論じられてこなかったホッサールト作品のエラスムス的性格に光をあてる。すなわち、ウェヌスとマルスの物語を笑いという観点から読み解き、また、それを「逆さまの世界」のような当時人気を博した滑稽なトポスと結びつけることで、《ウェヌスとクピド》が、人間の本性に従い、欲望を抑えずに生きるという当時の道徳においては愚行とみなされる振る舞いによってこそ人は幸せに生きられるというエラスムスの思想、多義的でパラドキシカルな諧謔の精神の反映であることを明らかにする。そしてこの新たなホッサールト像を、ラブレーやブリューゲルに代表される16世紀の笑いの芸術文化のなかに位置づけたい。